

2019年度特別支援教育に関する実践研究充実事業  
 (新学習指導要領に向けた実践研究)  
 成果報告書 (概要)

受託団体名
横浜訓盲学院

## 1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
学校法人 横浜訓盲学院	特別支援学校	視覚障害	横浜訓盲学院 (よこはまくんもうがくいん)

## 2. 事業の実績

## (1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成 31 年 4 月 17 日	学院盲ろう幼児、児童、生徒の担当者会を開催。管理職、研究部と今年度研究の方針を定める。	学院盲ろう幼児、児童、生徒の実態を把握し、研究の方向づけができた。
令和元年 7 月 15 日～ 7 月 19 日	パーキンス盲学校国際支援部門パーキンス・インターナショナル (以降 PI と表記) の専門家 2 名を招く。昨年までの振り返りと今年度の事例となる幼児、児童、生徒の実態をもとに職員研修会を実施。事例 5 名の実際の活動を通して実地研修及びそのまとめとなる研修会を実施。	PI の専門家の協力のもと実践教育の研究、協議ができた。
令和元年 10 月 29 日	バーバラ・マイルズ氏の著書「盲ろう者にとっての手の重要性」の翻訳を学院ホームページに掲載。	盲ろう幼児、児童、生徒の触覚の重要性を再確認できた。
令和元年 11 月 29 日	PI との実践研究及び協議で得たことを踏まえ、事例の幼児、児童、生徒の担任が報告書を作成。	実践研究の内容を整理することができた。
令和 2 年 1 月 7 日	報告書をもとにした校内研究発表会を実施。	研究内容を学内で検討、協議し、共有することができた。
令和 2 年 2 月 22 日	全国の盲学校へ成果報告会の案内、各地からの参加者と学院全教職員で事業の成果報告会を実施。協議をもって成果を検証した。	外部からの意見、助言を受けて検証することができた。
令和 2 年 4 月	報告書をまとめ、全国の盲学校と成果報告会参加者に配布する。	事業成果報告を公開できた。

## (2) 研究課題

盲ろう幼児・児童・生徒の自立活動とアセスメントについて、盲ろう教育の高い専門性を持つ PI と連携して実践研究を行う。

## (3) 研究の概要

盲ろう児の教育において必要とさせることは、一人ひとりの盲ろう児の理解を深めていくというアプローチである。年度初めに盲ろう幼児、児童、生徒の担任者会で、学院の盲ろう幼児、児童、生徒の実態を把握し、個々の指導内容を踏まえた今年度の研究の取組を確認した。PI を招いての研修会においては、盲ろう幼児、児童、生徒の実際の活動を通して、担任との信頼関係の構築、盲ろう児にとって難しいとされるコミュニケーションに焦点を当て、触れて感じ合い分かること、身振りサインやオブジェクトキューの活用、ハンドアンダーハンドや手を通しての触覚的なかわりから指文字へとつながること、さらに言葉へとつながっていくものについての実践研究を行った。その際の触覚の役割の重要性、好きなこと、やりたいことができる場としての学校環境づくりや年齢適応的に取り組む自分活動の大切さについて協議した。これらをもとに成果報告会を実施し、今年度の研究を検証した。

## (4) 研究の成果

盲ろう教育は、個々に個性を持つ存在としてひとり一人を理解していくこと、その理解を深めるプロセスが教育内容につながり、幼児児童生徒の実態把握となる。そして、ひとり一人を取り巻く環境がどうあるか考える。かわる人の存在も一つの環境としてとらえる。盲ろう児は自ら外界の情報を取り入れることが難しい中で、情報の入り口、窓口となるのが人である。その人であるかわり手は、信頼関係を持った存在であること、盲ろう児はその人の手、導きによって外界を知る。そこに信頼関係、安心感のある存在であることは不可欠となる。そのために幼児児童生徒との信頼関係を構築していくアプローチも必要になる。もう一つの環境は、幼児児童生徒が活動する場である。学校の建物や生活の場がどうであるかである。幼児児童生徒が動きやすい動線であったり、安全でわかりやすい環境であることが重要な要素になる。また、それに関連してオブジェクトキューの活用がある。それを使った日課ボードの活用、カレンダーワークなども幼児児童生徒を取り巻く環境の中で安心、安全、わかりやすい、信頼のおけるものがあって幼児児童生徒の活動が支えられ、展開される。

次に触覚の役割である。初期にあっては足の触覚、身体全体の皮膚感覚も障がいの重い幼児児童生徒には見過ごすことができないところである。その意味ではその幼児児童生徒の持てる感覚すべてをいかに活用できるかということ踏まえ、盲ろう児における触覚の重要性である。盲ろうの障がいにおいて、触覚の役割は極めて大きく、注目点は触覚としての手へのアプローチである。極めて乏しい情報下において、触れている状況は安心感でもあり、そこを通して情報が得られるという入り口である。安心感のあるかわり手の存在、その手はハンドアンダーハンドのような外界のものを知る手立てにもなる。また、その接触している状態の中で行き交う人と人との感情であったり、意思交換の始まりのようなものまでも考えることができる。それが、やがて指文字などの言葉にもつながっていくということである。そしてこれらの先にあるのがコミュニケーションである。触れて感じ合うこと、身振りサイン、オブジェクトキューの活用、指文字へとつながっていくコミュニケーション、言葉へとつなげるアプローチである。盲ろう児の最も難しい課題とされるコミュニケーション、だからこそ言葉を持つことを目標としていくのである。

さらに、これらの教育の根底にあるのが自分らしく自分のできることをすることです。自分のことが

できるようになるという観点に立ったアプローチは、その人となりの原点的な意味合いを持った大切な課題であり、教育活動となる。

#### (5) 課題と今後の方策

幼児、児童、生徒は日々成長する。その成長によって行動も変化し、それに応じて環境もかえていかなければならない。また、そうした成長の過程に応じて、かかわる側がかわっていく必要がある。幼児児童生徒たちが培ったものを土台として、それぞれが積み重ねていくような継続性と成長の変化に応じたかかわりを併せ持つようなことが必要となるであろう。